首里城正殿
ハンドブック







平成の首里城正殿

琉球王国時代、1768年と1846年の大規模修理の記録が残されていたことから、その記録を中心に様々な調査研究を行い、復元整備を行うことができました。

令和の首里城正殿

平成の復元を踏襲しつつ、平成以降の新たな調査研究の知見を取り入れて瓦模様、木・石彫刻、漆塗装など、様々な製作仕様を変更しました。

主な変更点

1. 中央の唐戸上の模様を変更
   獅子と牡丹唐草の連続模様とした
2. 基壇と階段の高欄（手すり）の
   石獅子の体・顔の向き・造形を変更
3. 唐破風両脇の獅子の木彫刻の形状や、
   大きさを変更
4. 壁面塗装材を久志間切弁柄（沖縄県内の
   鉄バクテリア由来の原材料）の使用に変更
5. 久米赤土塗の仕様の変更
6. 軒丸瓦の牡丹模様を変更
7. 金箔部分に「金磨」という技法を採用

琉球王国・首里城

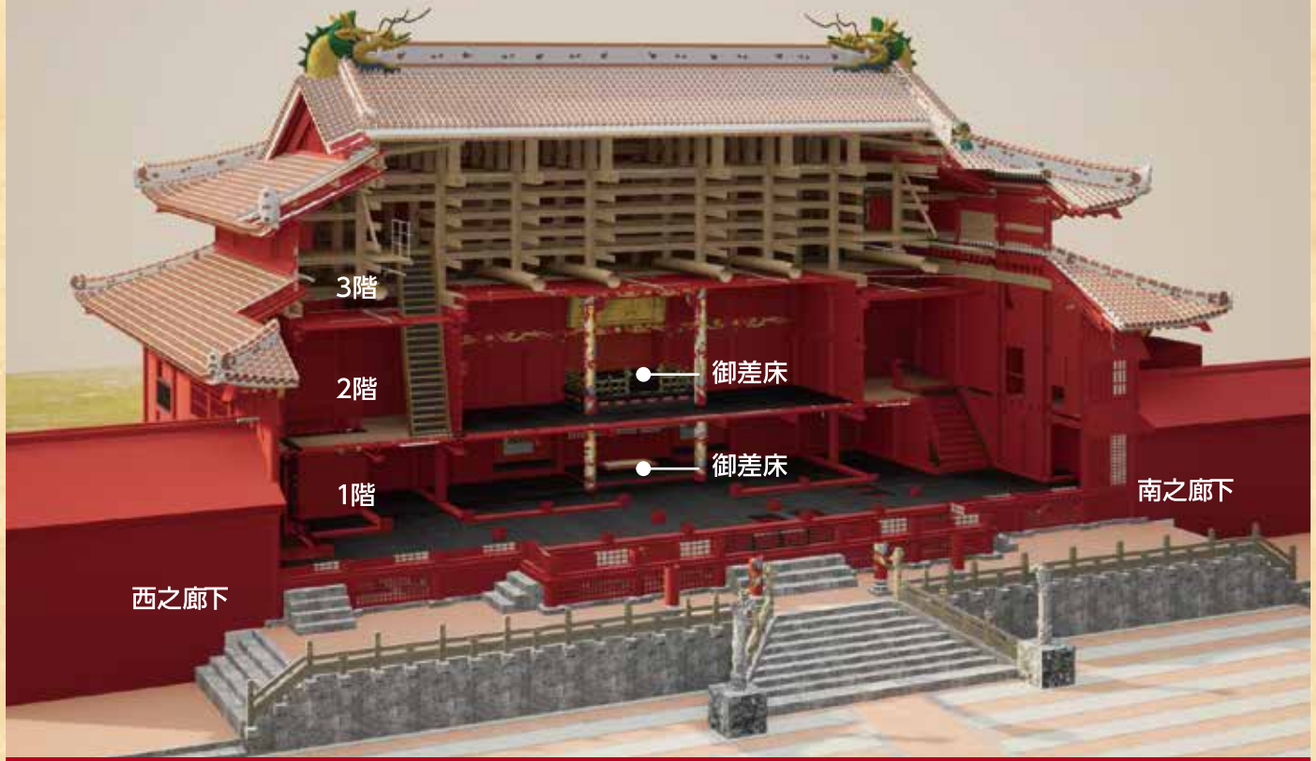
琉球王国は1429年から1879年まで450年間、日本の南西諸島に存在し、海外交易で栄えた国でした。首里城正殿は琉球王国最大の木造建造物です。発掘調査により、最初の正殿は14世紀末に建てられたと推定されています。
首里城の歴史は焼失と再建の繰り返しでした。復元モデルは1709年に火災で焼失し、1712～15年に再建された後、1925年に特別保護建造物（後の国宝）に指定をうけ沖縄戦で焼失するまでの正殿です。特に首里王府が大規模修理を行った1768年と1846年の記録が残る18世紀中期～19世紀前半をモデルの中心としています。



お問合せ
首里城公園管理センター
沖縄県那覇市首里金城町1-2
TEL 098-886-2020
https://oki-park.jp/shurijo/
首里城公園HP

写真提供
内閣府沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所、
沖縄県土木建築部首里城復興課、沖縄県立埋蔵文化財センター
※無断転載を禁じます。

首里城正殿の内部構造



アジアの中でも独自の特徴を持った宮殿建造物

北京紫禁城など、アジアの宮殿建築では、基壇（石積みの土台）の上に屋根が二層の木造建造物が建てられ、内部空間は吹き抜け一階で、中央に玉座があることが通常ですが、正殿は中国の宮殿建築を基にしながらも、独自の特徴を持った建物となっています。

首里城正殿だけの特徴としては、外観が二層の屋根となっていますが、内部は三階建てとなっています。国王の玉座が、一階・二階ともにあることも特徴です。三階は風通しのための窓があり、一階・二階の温湿度を調整する機能があったと考えられています。

正殿二階 御差床





正殿二階は「大庫理」と呼ばれ、「御差床」という玉座があり正殿で最も華やかな空間です。「御差床」は寺院で本尊を安置する須弥壇形式となっています。須弥壇の入り口には正殿正面の大龍柱・小龍柱と同じ龍柱が木彫刻されています。周囲の手すり（高欄）は黒漆に沈金技法で鉄線（クレマチス）と忍冬（スイカズラ）が刻まれています。その高欄の柱は長ぐつ状の独特な形状となっています。下部には葡萄と栗鼠の模様が彫刻されています。

正殿一階 御差床



正殿一階は「下庫理」と呼ばれる大広問で、王府の重要な儀式を行う空間です。中央には国王の玉座である「御差床」があり、国王が着座し、その周囲に役人が居並んで祭祀儀礼や祝宴がとり行われていました。「御差床」の上部には絹製の垂飾に金龍五色之雲が刺繍され、五色のガラス玉が装飾されています。

二階玉座の下部の葡萄と栗鼠

葡萄は、たわわに実り豊かさを表し、多産の栗鼠は国王家の子孫繁栄を祈るための模様だったと思われます。中央アジアから中国を経て、琉球にもたらされた吉祥文（おめでたい模様）として玉座を飾ったと考えられています。



一階玉座を飾る垂飾

金龍五色之雲を琉球古刺繍という独特な技法で描いています。垂飾の下部は、平成の復元では赤色のガラス玉のみで円弧を描いていました。令和の復元では新たな知見から五色のガラス玉で装飾され、一層華やかさを増しました。



御書扁額『中山世土』

平成



令和



二階の壁面には中国皇帝から贈られた御書を、琉球で漆塗の扁額に写して掲げていました。『中山世土』は、清朝の康熙帝より贈られたもので「中山（琉球の別称）は代々琉球国王の国である」という意味。今回の正殿復元で最も変わったところで、琉球王国時代の御書扁額製作の記録や、皇帝御書扁額の現存事例から、地板は黄色塗で、9匹の龍が額木に彫刻されていたことが判明したため、それを反映させています。

おせんみこちゃ



「おせんみこちゃ」は正殿の中で最も東側にあり、部屋の端には神壇が設けられています。琉球王国では、太陽が昇る東は神聖視されました。国王は毎朝、この場所で抹香を焚き、女官とともに祈りを捧げました。

正殿基壇遺構



正殿は、基壇と呼ばれる石積みの土台の上に建てられています。正殿の基壇はこれまで七度作り直されたとされ、第3期の基壇の階段は直角に作られましたが、復元のモデルとされた18世紀中期以降の階段は末広がりの階段となっています。